

想眼鏡

二月十九日付の京都新聞夕刊に掲載された「姿消す洛北高の名建築を残す方策がなされていくからである。」

まず最初に頭に浮かんだのは、建物の価値に関して十分な議論と検討があったかどうか、また、その価値を適切に評価し、保存の技術的方法が十分に検討されたかどうか、という疑問である。というのは、私がこの春まで住んでいた英国では、歴史的建築のみならず、今

の意識が強く、さまざまな形で名建築を残す方策がなされていくからである。

■名建築に三段階等級

独立団体としては、美しい国士を保存しようという有志によって十九世紀末に設立されたナショナルトラストがあり、森林や公園、歴史的建物の保存事業を行っている。また、公共では一九八四年に設立されたインテ

多少費用がかかろうとも保存する方向で建設事業が行われるケースが多い。その方法も、すべてオリジナルに忠実に再生するものから、正面部分のみの保存まで、実に多形である。

■維持・保存に検討を
イギリスのみならずヨーロッパの国では、保存と住環境に関する住民の意識が高く、現代建築に対しても常に厳しい視線が投げかけられている。従って、建築家は甘やかされることになり、設計される現代建築の質は、かなり高い。つまり歴史的建築への深い洞察が質の高い新しい

近代建築保存の公開コンペを

リッシュ・ヘリテージという団体が、やはり建物の保存事業を進めている。この団体は、名建築としての重要度に従って三段階の等級を付け、地方自治体とともに改築などを厳しく監督している。

建築家

連 健夫



うなコンペ方式を提案したい。
古いものをすべて残そうと言っているのではない。むしろ新しい建築が経済的理由や創造的理由から必要不可欠と考えている。留意すべきは、何の疑問もなくスクラップアンドビルドを繰り返して、過去を貴重なものと一緒に脱ぎ捨ててきた日本の問題点である。さまざまな建築の価値、すなわち設計、歴史、構造、材料、町並み、そして建物の多角的検討が、歴史的な京都であればこそ大切と強く感じるのである。

ほかに国際団体として「D O C O M O M O」という組織があり、建築後三十年以上たった建物は保存の対象として検討するという「三十年法」を唱えている。

「保存」することを望みたい。その建築を生み出しているとも言える。前向きに保存の解釈と未来の学校像を描いた学校建築の公開設計コンペを行い、優れた設計案を募ることが必要である。適切な設計条件と運営組織、優れた審査員の中で公正に選ばれるよ

むらじ・たけお氏 一九五六年京都市生まれ。東京都立大学大学院修士課程修了。AAスクール(ロンドン)大学院名譽学位取得。設計建築に城北学園、足利学園など。共著に「学校の多目的スペース」「学校建築海外事例集」など。

際会館、智徳院会館などがあげ